慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	編集後記
Sub Title	
Author	奥田, 敦(Okuda, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2016
Jtitle	Keio SFC journal Vol.15, No.2 (2015.) ,p.206- 206
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 新しい安全保障論の展開
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1502-0206

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

編集後記

○○人としてのアイデンティティに違和感はないか。今回の特集論文を読みながらそんなことが思い浮かんだ。安全保障の議論に限らず、国際関係を論じる際に、国家はしばしば擬人化されて語られる。米国、中国、ロシア、日本、あたかもそれらが生身の人間さながらに意思があって、アイデンティティもあって、感情も持って行動しているかのようにである。

とはいえ、国家の意思が、その構成員たる人々の意思を十分に反映しているかどうかは、はなはだ疑問である。国家がすべての国民をゆりかごから墓場まで手厚い社会保障のもと守ってくれるのならともかくも、いまや先進国と呼ばれている国々であっても、大抵は、国内に貧困問題、格差問題を抱えている。一人一人にとって、○○人としてのアイデンティティが盤石とはいえない中で、国民の気持ちを束ねることは容易ではない。

そうした状況で有効なのが、外敵の脅威である。貧困や格差という敵との戦いには時間がかかる。国民を統合するほどの効果はそう簡単には得られない。であるとするならば、敵は国家の外に求めざるを得ない。国家が国家としてのアイデンティティを保ち、より強固な統合を果たすための外敵である。安全保障というのは、一見すると対外的な問題のように見えるけれど、実は、対内的な問題のために存在しているようなところがある点を見落としてはいけない。

もちろん長距離弾道ミサイルを国際社会からの制止にもかかわらず打ち上げるような政府があったとするならば、それは確かに脅威であろう。しかし、それはあくまでも政府の話である。もちろん擬人化して語られるから、あたかも、そこに統一された国民の総意があるかのようだが、実際には、そんなことはないと見ておくほうが自然だ。一人一人の人間のレベルでは、罪のない個人を外敵に仕立て上げる必要もないし、仕立てあげられたくもない。テロリスト組織の支配地域に留まることを余儀なくされている人々の意思は、明らかにテロリストの組織の意図とは別物だ。

つまり、人間さながらに、歴史や社会の文脈の中で流されがちな国家、その構成員、つまり国民としての人ではなく、人間として一人一人を見つめなおし、人間同士のつながりの存在を思い出すことが大切ではなかろうか。そこには、国家が自らのアイデンティティの確保のために汲々としている「境」の問題は存在しない。国民としての安全が保障されても、そのことによって人道的な危機が招来されてしまったのでは、元も子もない。それが、一部の人々のアイデンティティを強固にするために行われたのでは周りは堪ったものではない。

「強い人間とは人を投げ倒す人ではなく、怒りの時自分を制することのできる人である」とイスラームは教える。まずは自分の怒りを抑えよう。どんなに煽られてもぐっと堪えてみる。人道の危機を回避と安全保障を両立するためのスタート地点はそんなところにあるのかもしれない。

こうして実に刺激と示唆に富む特集の編集の責任者を務めていただいた神保謙先生、そして自由論題も含め、執筆者の皆様に心より御礼申し上げたい。お陰様で、新入生の皆様に湘南藤沢学会のこの活動成果を無事にお届けできそうである。関係の皆様方に深く感謝する次第である。

奥田 敦
KEIO SFC JOURNAL 編集長